

ウィリアム・ジェイムズにおける道徳と宗教

林 研

(和文要旨)

ジェイムズは道徳論において、道徳法則を否定して功利主義的な態度を取るが、道徳の起源については経験以外の原因を認める。このことは宗教的経験の分析で超自然的原因を認めることと平行であるため、神的な「理想的秩序」が道徳の起源でもあると推定できる。しかしそれでは規範もあらかじめ存在するようになってしまう。ここではジェイムズのプラグマティズムを考え合わせる必要がある。プラグマティズムは、真理は行動の結果によって検証され、検証によってその都度真理が生まれると考える。つまり、「理想的秩序」はそれ自身善なのではなく、人間がその要求を受けて行動したときに初めて善が生じるのである。その要求は個人的な宗教的経験から来るため、規範化は難しい。ゆえに道徳判断は人間的な基準によるしかない。しかし、神的な要求は断続的に生じ、その影響を受けた人間行動が新しい真理を生成し、道徳規範は常に改善されていくと理解される。

(Summary)

James denies moral law and takes a utilitarianist-like viewpoint in his ethical discussion. And yet he admits some moral sources besides experience. This outlook is in line with arguing that supernatural sources are suggested from the analysis of religious experiences. This would mean that a divine “ideal order” can be thought of as a source of morality. But if that is the case, there would appear to be a supernatural moral norm. Here, we need to consider James’s pragmatism. In pragmatic thought, truths are always verified by the result of action and are verified anew with every action. In this case, an “ideal order” is not good in and of itself, but rather good is something that occurs when men act according to its demands. As those demands come through personal religious experiences, it is hard to make a norm. Moral judgement must depend on human criteria. But divine demands come to us intermittently, and human acts based on those demands create new truths. Moral norms are therefore understood as continually improving.

1. 序

ウィリアム・ジェームズ (William James, 1842-1910) は、アメリカで誕生した哲学であるプラグマティズムの普及者として広く知られているが、宗教学の分野で名著とされている『宗教的経験の諸相』(以下、『諸相』と略記)の著者でもある。英米哲学は概して自然主義的傾向が強いが、そのなかにあつてジェームズは際立って宗教的な哲学者だと言える。また彼が道德にも強い関心を見せていることはしばしば指摘される場所である。

道德そのものを論じたジェームズの著述は意外に少ないのだが、明確に主題化された論文として、『信じる意志』所収の「道德哲学者と道德生活」がある。ここで彼は道德判断の規準を「できるだけ多くの要望を満足させること」(WB 610)であるべきだと主張している。反面あらかじめ存在する道德法則のようなものは否定されており、こうしたジェームズの立場は現代の規範倫理学の区分から見れば功利主義に属すると言える。

功利主義は現実的な計算に基づいて善悪を判断するため、人工的で即物的なニュアンスを持っており、一見非宗教的である。しかし『諸相』では神的な「理想的秩序」の存在を肯定する世界観が提示されており、ジェームズの思想には、人間的な善と神的な善とが混在しているように見える。本研究はこのことを整合的に理解するため、プラグマティズムの真理論を軸として、ジェームズの道德論と宗教論との連結を試みるものである。

2. ジェームズの道德論

本節では、論文「道德哲学者と道德生活」を読解することで、ジェームズの基本的な道德論を確認する。

まず、この論文では冒頭で、「あらかじめ教義的に仕上げられた倫理哲学というようなものがあり得ないことを示す」(WB 595)という目的が掲げられている。これは、すでに存在するものとしての道德規則を見つけて記述するという流儀への批判だと言える。これを論じるために、ジェームズは道德の問題について、道德の起源を問う「心理学的問題」、善悪や責務という言葉の意味を問う「形而上学の問題」、善悪の尺度を問う「決疑論的問題」の三つのカテゴリーを設け、段階を踏んで考察を進めている(WB 596)。

一番目の「心理学的問題」、すなわち道德の起源について、ジェームズはまず、善の希求は身体的な快と行為の連合から生じたというベンサムやJ・S・ミルらの見解を基本的に認める。これは、道德は自然的なものであり、善の観念はあくまでも経験をもとに作り上げられるという、経験論的な道德起源論である。

しかし、ジェイムズの関心はむしろ、その説明では割り切れない事象に向かっていく。抽象的な道德感覚、例えば平穩、冷静、実直、誠実のような精神的態度が好ましく感じられるのは、「より理想的な態度がもともと純粹にそれ自身のために好まれるということではかままったく説明がつかない」(WB 597) というのである。

純粹に内的な力がここで確かに活動している。すべてのより高い、より深い理想は革命的である。こうした理想は過去の経験の結果という形でよりも、十分に可能な未来の経験の原因という形で現れることの方がはるかに多い。(WB 598)

つまり、そうした抽象的な道德感覚は、経験の結果であるというよりも、それが生じてから社会に影響を与えていくような原因的なものだというわけである。その感覚がどこから来るのかについては、ジェイムズは述べていない。しかし、例えば F. バウアーはこの問題の分析のなかで、ジェイムズの『心理学原理』に「伏せられた神託」という表現の使用を認め¹、これが道德の源泉であり、さらにそれは神を意味すると解釈している²。ここはもう少し慎重に検討すべきところと思われるので、次節で宗教論と重ねてもう一度考察する。

二番目の「形而上学的問題」、善悪や責務といった道德言語の解釈は、三番目の「決疑論的問題」のための予備的議論と言える。ここではまず、善というものがそれ自体では存在しえないという見解が示される。その理由は、感覚し思考する存在がいない世界には善も悪も存在しえないからである(WB 599)。物質的世界はただそのようにあるだけである。思考者が一人だけいても、事態は変わらない。思考者が二人になったとき、はじめて葛藤が生じ、善いとか悪いとかいうべき現象が実現し、実現することによってその概念も存在するに至るといっているのである(WB 600)。

一般にわれわれは、道德には普遍的なルールがあるにちがいないと考えがちである。しかし上記の考察からすれば、ルール以前に道德的概念自体があらかじめ存在することはできず、われわれの具体的な生活のなかで生じてくるものとみなされる。例えば「責務」と

¹ 「人がずっと得ることを求めている最も特徴的で独特に道德的な判断は、先例のない場面や孤立した非常事態で、一般的な文面的原理が用をなさない場合であり、そこでは伏せられた神託だけが語ることができる」。William James, *The Principles of Psychology Vol. II* (New York: Dover Publication, 1890), P. 672.

² Frederick Bauer, *William James on Morality* (Bloomington: iUniverse, 2009), pp.199-202.

いう道徳的概念は次のように理解される。

私たちは、具体的な人によって現実的になされる要求なしにはいかなる責務もありえないことだけでなく、要求が存在するいかなる所にも責務が存在することを理解するのである。要求と責務は実際のところ、同じ対象を指す語である。（WB 602）

したがって、ジェイムズの「形而上学的問題」は次の結論を得る。

「善」「悪」「責務」という言葉は、個々人による支えから独立した絶対的性質を意味しない。それらは、現実には生きている心の現存を離れては、存在のなかにはいかなる足場も拠りどころも持たない、感じや欲望の対象である。（WB 604）

道徳的概念の成り立ちがこのようなものであるなら、人間的な要求のないところに善悪は存在しない。道徳法則には居場所がないのである。この理解により、道徳の尺度を問う「決疑論的問題」に入る前に、人間から独立した道徳の存在が否定された。

その上で三番目の「決疑論的問題」には、個々の人間による要望への対処という形で答えられる。

要望されるあらゆる事柄が、それが要望されるという事実によって善であるのだから、倫理哲学の指導原理は、単純にいかなる場合にもできるだけ多くの要望を満足させることであらねばならないのではないか。（WB 610）

ジェイムズの言う「決疑論的問題」は、現在の倫理学では規範倫理学のカテゴリーに相当する。規範倫理学の代表的な類型としては功利主義と義務論（または直観主義）の対立がよく知られている。前者は社会全体の幸福を最大化することを目的とする結果重視の考えであり、後者はわれわれが生まれながらに知っている道徳に従うことを志す。ジェイムズの主張は、目的が幸福や快ではないという点で典型的な功利主義とはやや異なるが、上記の道徳論には、結果から判断するという帰結主義や、効用が足し合わされると考える総和主義が表われている。これらは功利主義の大きな特徴であり、それを採用している点で、やはりジェイムズの立場は功利主義の陣営に分類されるであろう。

その一方で、先に確認したように、道徳の起源に関しては経験主義的説明ではとらえられない領域が指摘されており、そこには神的な存在も想定された。このように、規範としては功利主義を採用しながら、その背景に宗教的な領域を置くのがジェームズの道徳論の特徴であろう。功利主義は人間の価値観を基盤とする人為的な規範であるが、一方でジェームズは「超自然的」な原因を考えている。この一見不釣り合いに見える道徳の規範と起源の両立を理解するため、次にジェームズの宗教論を検討したい。

3. 超自然的宗教論

近現代では宗教を擁護するにも自然主義的な立場を取る論者が多く、その場合、宗教的道徳論についても自然的な起源に基づいて説明されることになる。しかしジェームズは宗教現象を超自然的に理解している³。その理由のひとつは、彼の方法論である宗教的経験の分析から得られる結論である。

『諸相』前半における重要なテーマのひとつに、人生が一変してしまうような回心が起こるメカニズムの解明がある。ここでジェームズは心理学的なモデルを設定し、回心を、潜在意識的領域で育っていった宗教的観念が「意識の場」のなかに突発的に侵入し、支配的な位置を占めることだと解釈する。しかしこのモデルでは、回心に際して現れるエネルギーと方向づけ、すなわち力と意味の両方を説明することができないという問題が残る。潜在意識下の記憶は意味の説明にはなるが、意識内への突入力は説明できない。逆に、生理学的な反応という力の説明は、回心が鮮烈な意味を伴うことを説明できない⁴。そして、ジェームズは、『諸相』のある脚注において次のように表明する。

意識内への突入のなかには、長い期間潜在意識的に潜伏していたことを簡単には示せないようなものが時折あることを、私は率直に告白せざるをえない……〔そうした結果は、聖パウロの場合のような〕有益で合理的な場合には、より神秘的または神学的な仮説に帰せられるべきであろう。(VRE 218n)

³ 「もしすべての思想家を自然主義者と超自然主義者に区分するなら、私は疑いなく、たいていの哲学者たちとともに、超自然主義の部門に入らなければならないだろう……理想的なものとの交流において新しい力が世界に入ってきて、新しい出発がここ地上でなされる、と私が信じる以上、私は断片型またはより粗野な型の超自然主義者の内に分類されざるをえないと思う」(VRE 464-5)。

⁴ Wayne Proudfoot, "Pragmatism and 'an Unseen Order' in *Varieties*," *William James and a Science of Religions*, pp. 31-47 (New York: Columbia University Press, 2004), p.39.

これは、潜在意識に保存されているにしては過去の経験にその原因が見られないようなケースである。この状況は、道德の「心理学的問題」で、道德の起源を過去の経験から説明しきれないと見たことと平行的関係にあると言える。そして経験以外のどこかから信仰や道德がやってくる時、それは神秘的な原因によるという解釈が採用されるのである。

ジェイムズは本来、科学的であることを信条としており、そこからすればこの判断は不可解に見えるかもしれない。しかし、科学をデータから仮説を立てて検証する方法論とみなす限り、主義主張である唯物論や自然主義は必要なものではない。経験の事実をもとに研究するとき、偏見を加えずに見るなら、少なくとも心的な現象には超自然的な働きがあってもよい。科学が超自然的解釈を排除するのは物理法則と衝突するからであって、心的レベルの超自然主義を排除する正当な根拠はないのである⁵。

実際、回心者はしばしば超自然的存在との交流を体験する。ジェイムズはこれを経験の事実として扱う立場を取るわけだが、交流の相手をいわゆる神であるとは断定しない。多くの証言から総合する限り、相手は自分「より以上のもの」(the more)であるのみで、経験からその絶対性や単一性は判断できない。ジェイムズはむしろ神の有限性を想定しており、キリスト教の教義とは距離が置かれている。ただし、「より以上のもの」が一般名詞的な意味合いで「神」と記述されることは少なくない。

その神的存在の機能的側面を抽象的に表現するときには、「理想的秩序」(ideal order)、「見えない秩序」(unseen order)などの表現がしばしば使われる。この「秩序」は機械的なものではなくて、未来を約束してくれるような目的論的なニュアンスを持つ。

神の観念は、機械論的哲学において大変流行しているような数学的観念に比べてどれほど明瞭さで劣るとしても、それに比べて少なくとも、永久に保たれるべき理想的秩序を保証するという実際の優位を持っている。(PR 532-3)

それが「理想的」であるからには、善の観念に関係するであろう。また、この「秩序」

⁵ 近年、脳科学から宗教体験を研究しようとする動きが活発になってきており、その結果、宗教体験に際して脳内に変化が見られることが示されている。しかし、「ある体験に脳内の変化が確認される」ことは、「その体験に脳の変化が伴う」ことの言い換えにすぎない。よく言われるように、相関関係は因果関係を意味しないのであるから、体験を脳の変化に還元することはできない。その宗教体験の源泉が神的な存在であるかどうかという問いは、科学が否定することも肯定することもできない主張なのである。杉岡良彦「脳科学や精神科学からみた宗教体験とその意味」(『脳科学は宗教を解明できるか?』 芦名定道、星川啓慈 編、春秋社、2012年)、96頁参照。

は時に「道徳的秩序」という表現もなされており（WB 533）、道徳とのつながりが推測できる。また、『諸相』では宗教的意見の価値を判断する際、「道徳的有用性」が利用可能な規準として挙げられており（VRE 25）、これは、宗教的経験すなわち「より以上のもの」との交流が結果として善をもたらすということを示唆している。

先に見たように、超自然的領域は心理学モデルでは説明しきれないところに想定されており、経験の連合からでは説明できない道徳の起源とパラレルな関係にあった。つまり、ジェイムズが道徳の起源として想定するものも、この「理想的秩序」である可能性は高い。

だとすれば、この秩序と道徳の規範との関係はどうなるだろうか。『諸相』には、次のような記述がある。

宗教生活は、見えない秩序が存在しているという信念、そして、私たちの最高の善はその秩序に私たちが調和的に適応することにあるという信念から成る。（VRE 55）

ここには、少なくとも宗教者にとっての善は超自然的な「秩序」に従うことであるという、古典的な宗教的・道徳観が見て取れる。しかし、「道徳哲学者と道徳生活」では、人間から独立した道徳原理がはっきりと否定されていた。これを考え合わせるなら、「秩序」はなんらかの道徳性を持っているが、その道徳性は人間と離れて存在するのではなく、人間との関係のなかでのみ表われるということになる。

このように、ジェイムズの道徳論と宗教論の関係は図式的に理解するのが難しい。そこで、これを整合的に理解する鍵としてのプラグマティズムの思想について、次に検討したい。

4. ジェイムズのプラグマティズム

プラグマティズムは、通俗的には「有用であることが真である」という考え方として知られているが、実際はそこまで単純なものではない。プラグマティズムの詳細な解釈はここでは省略するが⁶、真理性を判断する基準としてのプラグマティズムの用法について、以下に示しておく。

一般的な真理論においては、ある観念の真偽は、その観念自体のなかにあらかじめ含ま

⁶ 筆者のプラグマティズム理解については、拙論「プラグマティズムと科学・宗教——ウィリアム・ジェイムズの真理観」（『大谷学報』第93巻第1号、pp.1-19、大谷学会、2013年）を参照されたい。

れていると思われてきた。しかしプラグマティズムでは、真偽が観念のなかにではなく、行動のなかにあると理解する。つまり、その観念に基づいて行動したとき、結果がうまくいけば真であると判定されるのである。うまくいく、というのはジェイムズによれば「働く (work)」あるいは「経験どうしの満足な関係」などと記述されており、ここには「有用性」と「整合性」の二つのニュアンスが含まれている。「有用性」は個別のケースで役に立つという意味であり、これだけで真理とされるわけではなく、その結果が他の諸観念と軋轢なく調和するという「整合性」が前提として要求されている。この二つの要件について、プラグマティズムはいつも行動による検証を求め、結果にしたがって真理を変更していくという姿勢を取る。

この考え方は、真理と言うものの捉え方を根本から変更することを求める。真理が動的なものとなされるからである。

真理の真理性は、実際のところ出来事であり、過程である。過程とはすなわち真理が自身を検証する過程、真理の真理化 (verification) である。(PR 574)

ここでジェイムズは検証 (verification) という単語をあえて分断して、検証がすなわち真理の生成であるということを強調している。真理性は常時更新され続ける。そのようなものを人は真理と呼ぶのであって、それに先立つ「絶対的真理」というものは、人間にとっては極限概念であり、存在するともしないとも言えないわけである。

さて、ジェイムズはこのプラグマティズムを宗教論に積極的に適用する。プラグマティズムの原理によって宗教の正当化を論じる文脈は彼の著作中に数多く見られる。

宗教の効用、宗教を持つ個人へのその効用、その個人自身の世界への効用、これらは宗教のなかに真理があることの最高の論拠である……真であるものとは、うまく働くもののことである。(VRE 411)

神の仮説は、それがその語の最も広い意味で満足に働くならば、真なのである。(PR 618)

ただし、ここでは宗教的真理も常に検証にさらされるものと捉えられる。個人や社会の

あり方に矛盾や衝突を引き起こさない限りにおいてそれは真なのであって、例えばある教義が現実と折り合わない場合には変更が要求される。このことは伝統教団のような組織的宗教にはなかなか困難なことかもしれないが、歴史的に見れば、実際に神の理解は時代の風潮に合った形で変更されてきているのである（VRE 300-1）。

ところで、ジェイムズのプラグマティックな宗教観は神の絶対性・普遍性を否定する。プラグマティズムは人間の行動によって真理が生まれると考えるため、真理は神の持ち物ではなく、人間との相互作用のなかにしか存在しない。ジェイムズの解釈では、回心のような救いの現象も人間の側にそれを受け容れる条件が備わっているのはじめて起こるのである⁷。

こうした構造から敷衍すれば、道徳的真理もまた、神と人間との関係性のなかにのみ存在するのであって、神が所持していて一方的に指令するような形式のものではないと考えられる。神と人間との交流から、道徳は現実化され、そののち概念化される。ジェイムズの宗教的道徳論はこうした状況把握から生まれてきていると理解できよう。

では、ジェイムズの考える神、前節で見た「理想的秩序」はどのような存在形態をとるのであろうか。ジェイムズは言う。

私はむしろ、宇宙全体に対する私たちの関係は、私たちの犬や猫といったペットの人間生活全体に対する関係と同じであると信じている。犬や猫は私たちの画室や書斎に住んでいる。彼らは、その意義については何も感づくことなく、その情景の一部をなしている。彼らは歴史〔全体〕の曲線の単なる直線区間である。この曲線の始めや終わりや形態は彼らの認知を全く越えている。そして私たちも事物のより広大な生命の直線区間なのである。（PR 619）

ジェイムズによれば、「理想的秩序」は人間と同じ舞台を共有しているが、人間の知覚できる次元を越えた存在である。逆に言えば、意思の疎通は限られた条件でしかなされないものの、人間の行動は常に理想的領域を含む宇宙全体に反映されることになる。次にこうした世界観をもとに、ジェイムズの道徳論を再解釈してみたい。

⁷ 瞬間的な回心が起こる条件として、ジェイムズは、「発達した識閥下の自己を持ち、また漏れやすい、あるいは透過しやすい縁を持っていること」（VRE 223）を挙げている。

5. 道徳判断と「理想的秩序」

人間と神との関係、そして善悪の問題について、次のような記述がある。

私たちと神とは互いに取引関係をもっている。そして私たち自身を神の影響力に開くことによって、私たちの最も深い運命が満たされる。私たちの各自が神の要求を満たすか回避するかに比例して、宇宙は、そのなかで私たちの個人的存在が構成している部分は、本当により善くも、より悪くもなる。(VRE 461)

ここでも道徳の源泉は「神の要求」であり、その要求に応えることが善であることが示唆されているが、ジェイムズの見解の特徴は、神と人間との間にギブ・アンド・テイクの関係を見るところにある⁸。神は人間の行為を必要とし、人間が要求に応じて行動したときに初めて善が世界に生み出される。これは神と人間の共同作業である。

神が「要求」を伝える手段は、ジェイムズの立場からすれば、正典のようなものではなく宗教的経験ということになる。しかし、直接の啓示としての宗教的経験はまれにしか起こらない。そしてそれはしばしば言語化が困難な内容を持つ。この状況では、道徳的な判断について神に問うことは不可能である。つまり、日常における個々の道徳判断は人間が行うしかないのである。そして、人間的な規準で判断すると割り切った場合、功利主義は十分に有効であると考えられる。

功利主義にはもちろん欠点もある。いわゆる功利計算がそもそも本当に可能なのかは問われるべきであるし、また全体の利益という視点からは不平等が根絶できないという原理的な問題もある。しかし、道徳規則に発展性があるというのが功利主義の利点である。ジェイムズは、科学と同じように道徳も試行錯誤を繰り返すなかで合意を作りつつ発展するものと考えている。プラグマティズムに従うなら、道徳判断の結果はデータとしてその有用性と整合性が検証される。その結果、より善の方向へ向かうという動因がつねに含まれることになる。道徳も動的なものとなされるのである。

もちろん、この方法は人為的なものでしかないから、人間が善いと判断することが、人間以外の生命をも含めた宇宙全体にとっても善いかどうかを確かめるすべはない。しかし神的な秩序が人間と場を共有するものであるならば、それぞれの理想が重なり合う可能性

⁸ 「宗教は言う、神的なものは実際に現前しており、その神的なものと私たちの間では、ギブ・アンド・テイクの関係が現実のことなのである、と」(VRE 407)。

は十分にある。

犬や猫の理想の多くが私たちの理想と一致するように、そして犬や猫がその事実について毎日生きた証拠を得ているように、私たちもまた、宗教的経験が提供する証拠に基づいて、より高い力が存在し、私たち自身の理想と同じ理想の線上において世界を救うために働いていると信じてよいであろう。(PR 619)

人為的な道徳と神的な道徳が交差する場面が宗教的経験であり、それはまた、回心を経た宗教的天才を通して、まったく新しい善の形態をもたらすことがある⁹。それまで誰も考えつかなかった、あるいは誰も実現できるなどと思わなかったことが、宗教的経験の結果可能になるようなケースが実際にある。つまり神的な力は、はるか昔道徳の起源となったというだけではなく、今も断続的に介入してくるのである。こうした新しい価値もまた、プラグマティックな検証を経て人間社会に組み込まれて行く。プラグマティズムは常に可能性に開かれた思想であるため、道徳にもいまだ知られていない見解の出現が見込まれる。ジェイムズは、人間的な道徳が神的な「理想的秩序」の働きとダイナミックに相互作用しながら発展しつつあるような道徳的宇宙を示唆しているのである。

6. 結

ジェイムズは宗教的経験の分析から、神的存在である「より以上のもの」とその超自然的な働きとしての「理想的秩序」を推定した。そしてそれは道徳の起源とも捉えられていると見られる。この「秩序」は人間と直接に関係しているものの、人間が理解することはできない次元のものと思われる。したがって、人間は自ら道徳判断を行うしかなく、道徳規範を実用化する以上、功利主義が妥当と判断される。しかし、神的な力の介入はときおりあり、その経験をも含めた総合的な検証が常に求められる。その結果、いわば人間によるボトムアップの善と、神的なトップダウンの善とが一致することが理想とみなされることになる。

このような見解は、まず、人間の努力と相互調停がそのまま確かな道徳的価値を持ち、世界の改善に役立つことを保証する。これは功利主義の利点である。またその一方で、超

⁹ 「聖者たちこそ善の作者、創始者であり、増進者である」(VRE 324)。

越的な「秩序」を想定することによって、独善的になりがちな人間の価値観を相対化する視点も持つことができる。これは伝統的な宗教的道德観の利点である。ジェイムズの道德論は、プラグマティズムを介在させることによって、人間的規準と神的規準の両立を可能にし、これらの利点を併せ持つヴィジョンを示したと言えるだろう。

凡例

ジェイムズの著作については、以下のものを用いた。

“The Moral Philosopher and the Moral Life,” 1891, *The Will to Believe*, 1897.
(WB) : *Writings 1878-1899* (New York: The Library of America, 1992).

The Varieties of Religious Experience, 1902. (VRE) : *Writings 1902-1910* (New York: The Library of America, 1988).

Pragmatism, 1907. (PR) : *Writings 1902-1910*.

本稿では上記著作集のものをテキストに用い、引用・参照部には略号とそれぞれの頁数を示した。引用中の強調は原文に従った。引用文の翻訳は筆者によるが、以下の邦訳を参考にした。〔 〕内は筆者による補足である。

『ウィリアム・ジェイムズ著作集2 信ずる意志』、福鎌達夫 訳、日本教文社、1961年。

『宗教的経験の諸相』上下、榊田啓三郎 訳、岩波文庫、1969-70年。

『プラグマティズム』、榊田啓三郎 訳、岩波文庫、1957年。

キーワード：功利主義、道德の起源、宗教的経験、理想的秩序、プラグマティズム

Key Words : utilitarianism, origin of morality, religious experience, ideal order, pragmatism